

三島由紀夫の帰郷

辻 憲男（文学部教授）

三島由紀夫は大正14年（1925）の生まれなので、昭和の年と満年齢が同じである。召集令状が来たのは終戦の年の2月だった。小説『仮面の告白』によると、前年5月に、「本籍地の田舎の隊で検査をうけた方がひよわさが目立って採られないですむかもしれないという父の入れ知恵で、私は近畿地方の本籍地の日県で検査をうけていた。農村青年たちがかるがると十回ももちあげる米俵を、私は胸までももちあげられずに、検査官の失笑を買ったにもかかわらず、結果は第二乙種合格で、今また令状をうけて田舎の粗暴な軍隊へ入隊せねばならないのであった」。東京を汽車で発ったが、ひいていた風邪から高熱が出た。入営して診察を受けると、胸のゼイゼイいう音を肺疾患と誤診され、即日帰郷となった。「私は駆け出した。荒涼とした冬の坂が村のほうへ降りていた」「ともかくも『死』ではないもの、何にまれ『死』ではないものほうへと、私の足が駆け出した」。

事実もこの自伝的小説とあまり違わなかった。二度とも、兵にならないための「仮面」の帰郷であった。父母・師・友人弟妹に宛てた遺書も反故（ほご）になった。祖父は村出身の名士である。米、みそ、野菜などをもらって帰京した。

生まれつき虚弱で、祖母に溺愛された。徴兵検査の時の米俵というのは、40キロの土のうである。翌日、大阪の詩人・伊東静雄を訪ね、数日間滞在した。食事まで出したのに手みやげも持って来ない「俗人」！、と伊東は不快を感じた。



父祖の地はいま兵庫県加古川市志方町上富木。